

■実習体験記——現場における労務管理とその背景の問題を考える——

実習生という名のもとに、ある建設会社の木更津の少し南にある製鉄会社の輸出用岸壁の工事現場へ行った。

そこで味わった体験をもとに、現場における労務管理の問題とその背景にある種々の問題について、私なりに感じたことを書いてみようと思う。

実習をやっていた期間のその現場の作業内容は、ボックス型のシートパイル（鋼矢板）を建込むということが主であった。普通なら（効率的にも）埋立てをしてから陸打さし、その後でしゅんせつするのであるが、そのようにすると漁業問題に巻き込まれるということで、シートパイル（フランジ幅 42 cm, ウェブ 48.6 cm, 長さ 19 m 22 m のボックス型）を建込んでから埋立てをし、控矢板はそのあとで建込み、前面（海に面する方）の矢板と控矢板をタイ ロッドで結び、型わくを組みコンクリートライニングを行なうというような施工順序で行なう予定であった。

まず最初に行なったことは、導坑の打ち込みであった。つぎに三脚デリッキ船でパイルをつり、爪を合わせ、杭打船のハンマー（K 32 使用）を使っての打ち込み、また作業上の交通機関はチャッカーというように、すべて船を使用しなければならない。それゆえ、風が強かったり、波が高かったり、雨が降ったり（これはどこの現場においても変わらないことであろうが）、ときには干潮になったりすると、すぐ作業を中止しなければならない。台風接近などという、すぐ退避させなければならない。

雨の降った翌日は半日作業ができない。なぜかという、ハンマーの排気孔に水がたまるとその掃除をしなければいけないし、足場など濡れていると作業員の人達がすべり危険であるためある程度乾くまで待たなければならないというような理由からである。

とにかく、海の仕事は陸以上に手間がかかり、時間もかかることは確かである。

実習内容は、簡単な測量、パイルの打ち込み記録の測定などである。その中でも打ち込み記録の測定が主である。

現場へ行き、まず第一に感じたことはここで自分の行なう仕事があるのだろうか？ ということであった。

それゆえ、大学で行なっている授業に少しでも関係のあるものを見つけたとき（たとえば本でみた機械を見つけたとか、杭の転倒モーメントのことについてとか）の

喜びは大変なものである。このように、毎日平々凡々とまた周期的な仕事を行なっていた。そんなある日（少々風が強くと、波の高い日であったが）三脚デリックブームが倒れるという事故が起きた。幸いけが人はだれ一人いなかった。

次第に荒れてきた海を心配して、鳶の人達は作業中止の決断を下し、建込んでしまっているパイルの上に乗る爪を合わせる人は下へ降りてきた。また、三脚デリックのオペレーターをやっていた鳶の人はパイルをついたブームをパイルから離すと、旋回させて、ウィンチのガセットを止め、ブームよりたれているワイヤーの先端のフックをアンカーするためにウィンチを離れた。またそのときにはもうハンマーはパイルの打ち込みを開始していた。

ところが、自然はそのような人間の動きにおかまいなく、風は強くなり波も高くなってきた。

当然何もつっていないブームは揺れる。波によって船自体も揺れるし、風によりブームもおおられる。

そのブームはワイヤーで引ばられ、ワイヤーはウィンチで巻かれている。つまり、ブームの揺れによってウィンチの影響は当然ある。

ブームが波と風の振動とは別の振動をもち、何回も揺れているが、そのうち共振するとなお激しく揺れ、それと同時にワイヤーがゆるむ。ゆるんだワイヤーは当然ウィンチまで伝わり、ウィンチが逆回転する。そうすると、ウィンチをとめていたガセットがずれる。ウィンチのオペレーターがウィンチを離れているのであるから当然である。

ガセットがはずれるとブームとワイヤーの自重でワイヤーはひっぱられ、抵抗なくブームは倒れていく。

ブームは三脚デリックの丁度中間にしている、そのまま真すぐ倒れ、ブーム（25 m）の下より三分の一の辺が建込んでしまっているパイル（海面より約 7 m の高さに建込んである）の上につぶつかり、そこで折れ、さらにパイルを打込んでいる最中の杭打船の方に倒れていき、この船の管理室（船を管理している人の寝泊りする）の屋根につぶつかり、しばらく揺れ動いた後静止した。

その時打ち込み記録をとっていたため、パイルの目盛に注目していて、気がつくのが遅かった。この日は風の向きが南西であったため、ハンマーの油がかからないよう

にその風上に行き記録をとっていた。その位置はハンマーの2mぐらい左側で、丁度建込んでしまっているパイルが向側の姿をしゃへいしている。そのように、神経の集中が打ち込んでいるパイルにあったことと、記録をとっていた位置とが、ブームが倒れてくるのに気づかせるのを遅らせていたのである。後にいた鳶の人がいち早く危険を知らせてくれた。しかし、わずか1mぐらいしか離れていない頭の上に落ちてくるのであるから、どっちに(海か船の反対側か)逃げていいのかとまどった。グラングラン揺れ動くブームを恐怖におのきながら見守っていた。幸いどちらにもこころがり落ちてこなかったので生命の危険から開放された。

幸い、倒れてきた位置にだれもいなかったことと、倒れたブームがどちら側にもずれなかったことが、不幸中の幸いとなるに至った。

まず、この事故の第一責任者はウィンチを離れた鳶といえよう。確かに鳶の過失ではあったが、それだけですまされない問題を多く含んでいるようである。

現場の安全に対する監視は鳶にまかされていたこと、労務管理者がその現場に誰一人いなかったことなどをまず考えなければいけない。またこの輸出岸壁には土木技術者が主任さんの他二人しかいない。それでいて、この240mの輸出岸壁は四船団に別れ作業を行なっているのであるから、各船団に監督者をつけておけない。それであっちこっち動きまわっている。丁度このことがおきたときには作業員、オペ、技能工の他だれもいなかったのである。

現場の安全は暗黙的に鳶にまかされているが、彼らの安全に対する認識も問題になってくる。

つまり、彼らはその日の建込み枚数によって賃金が変ってくるのであるから、また鳶としてのプライドを考えた上で彼らなりの安全に対する認識もっているのである。彼らのプライドというのは少しなりとも危険をおかしても仕事をするというように、危険に体をはっているというようなものである。

このように各船団に監督者が常時いないということは非常にまずいことではないだろうか。なぜなら、鳶の暴走を食い止めてやる人がいないからである。

彼らが、お金の事ばかりに(そこまでいなくても作業時に瞬間的にそのような感覚に落ち入ることを意味する)頭を集中して、安全に対する認識を確固たるものにしなさい、すると彼ら(彼らばかりでなく)は危険への道へまよいこむといつて良いだろう。

では施工会社側はなぜこのようなスタッフ不足のまま工事を行なわなければならないのだらうか？。

それは施工会社自体工事請負の拡張の限度にきていて、人間にしろ、機械にしろ、その他財政面においても

過度な仕事を請負っていることに原因はあるのではなからうか。

たとえば、いろいろな機械が他の現場からまわされてくる。しかし、そのまわされてきた機械はすぐ使えるものが少なく、多くはポンコツに近いものであった。

それゆえ、船の艀装なり、機械の整備なりしてからでないと使いものにならないようである。また、使っている機械なども実に古びたものがあつたり、機能的に合理化されていないものもある。

一方企業者側からは期間を決められ、その範囲で行なわなければならない。艀装や整備に時間をかけている間に施工期間はどんどん減っていく。それらが終了し、いざ施工の段階になると期間がきめられているので、無理な、また過度な労働を強いられながらも、工事を行なわなければならない。事実この事故が起きる10日ぐらい前に、企業者側より、何日まで前面の矢板を打つ約束になっているのであるから、それまでにやれ、もしできないのなら事務所をたたんで帰ってくれといわたされた。それで、その日に所長さんは職員、技能工、オペの人達を招集してお盆休み返上でがんばってくれといったのである。

職員の人達はいやとはいえないであろう。全社のためにがんばらなければいけないだろう。いくら幹部の人の責任であろうとも。また不満を会社および幹部の人達にいだきながらも。

なぜ企業者側がこのように前面の矢板を打つことを急がせたかという、埋立をする会社との契約上早く矢板を打ってもらわないと、埋立ができなく、遅れただけその会社を遊ばせてしまうことになるからである。

とにかく、そのような事情があり、急いで工事を行なわなければならないのであったのである。しかし、機械もなく人間も少ない。結局個人的な負担となって、いろいろな形でしわ寄せされてきたのである。特に鳶の人達へは過度な労働となってしわ寄せされていく。朝早くより、夜足もとが見えなくなる時分まで。それでも、ちゃんと鳶の人達は働きにくるのである。作業中、神経をすり減し、肉体を激しく使う彼ら責めることができるだろうか。問題はもっともその背後にあるのではなからうか。それだけ過激な労働をしている彼らに、それだけの環境の整備を行なっているであろうか。確かにお金を相当はずんでやっていることは事実である。しかし、それ良いだろうか。この辺にも考えなければならない問題をだけで含んでいるようである。

また、その会社の労務担当の人は一人しかいない。その人は若く、土木、機械の知識にとぼしいし、事務的な仕事におわれ、現場へ行って安全に対する注意(常識的なことにおいても)してやることのできないのである。

結局労務管理を行なうのは現場の土木技術者であるが、何分他の仕事におわれ、その方になかなか集中できない。

一体彼らの労務管理をだれがやってくれるのだろうか。

この事故が起こった翌日、安全衛生委員会なるものが設けられ、いろいろ議論していたようである。この委員会を設けるきっかけとなったのは、あの事故に対してすぐ反応したのではなく、実習生をあのように危険なところで仕事をさせておいても良いかということと宿舎の同室の人が私の話を聞いて主任さんに話したことからである。

実際にもしあの事故で負傷者または死者を出していたなら、重大な問題として取り上げられたのであろうが、怪我人が一人も居なかったことを幸いに「ああ、そんなことがあったのか」とすんなりことの成り行きをすりかえられてしまっていたかも知れない。事故が起こってからこのようにあわてふためくより、もっともっと先に安全に対する対処ができなかったであろうか。もしそれができないようであるなら、無闇やたらに請負を増して行なってはならないのではなからうか。自分の身を知らずしてどうして事をなすことができようか。

もう一つ労務上の問題がある。作業員、職員は皆労災保険に入っている。しかし現場で怪我人負傷者がでてそれを使わずして、会社の負担で病院へ行かせる。

なぜ労災保険を使わないかという、企業者側に知れることを恐れているからである。隠せるだけ隠すそう

だ。そのようにして、当社は安全な現場管理を行なっていますといたところでもなになるだろう。

たとえば、後い症にでもなったら、それを一生会社側でみてやらなければならないのである。企業者側への信用による経済関係と、このように後い症になった人を会社で負担した場合の経済関係とどちらが利益があるか私にはわからない。しかしその会社のもので安心して作業を行なえるような環境整備をするならば、労災保険を使い、企業者側にガラス張りの態度で向い、本当に労務問題、安全問題に取り組んでいかなければならないのではないだろうか。いつまでも土木の世界を矛盾ある封建性の中にとじこめていることなく、「明日の土木」を担う世界を築いていかなければならないのではないだろうか。

以上、わずか1カ月の実習で体験したことをもとに、私なりに感じ、考えたことを書いてみました。

知識不足、若さのための未熟をさらけだしながらも、将来土木家になろうとするもの一人として、また明日の土木に期待する一人として考えてみた。

機械やその他の用語を間違えて使用しているものも多々あると思います。また無知からくる変な推定をして書いているところもあるかも知れまん。御忠告、御助言をいただけましたら幸いに存じます。

(武蔵工大 亀田嘉之・記)

泥水調整剤

近代土木用掘さくは

泥水で能率化!

テルナイトB バライト ベントナイト 帝石テルセローズ 海水用粘土

1. 粘性をつける (ベントナイト、帝石テルセローズ)
2. 粘性の調節 (テルナイトB)
3. セメント浚いの時 (テルナイトB)
4. 流動性の改善 (テルナイトB)
5. 比重の調節 (バライト)
6. 海水を用いる場合 (海水用粘土)



帝石テルナイト工業株式会社

東京都渋谷区幡ヶ谷1~31

TEL (466) 0146~9

説明書進呈